



TITLE:

6. Cooper-Stolanの仕事(Phys. Rev. B4 863(1971))の紹介(モレキュール型研究計画「超伝導ゆらぎと1,2次元の超伝導体の理論」報告,基研研究会報告)

AUTHOR(S):

和田, 靖

---

CITATION:

和田, 靖. 6. Cooper-Stolanの仕事(Phys. Rev. B4 863(1971))の紹介(モレキュール型研究計画「超伝導ゆらぎと1,2次元の超伝導体の理論」報告,基研研究会報告). 物性研究 1972, 18(3): C16-C16

ISSUE DATE:

1972-06-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/88468>

RIGHT:

## 6. Cooper-Stölan の仕事 ( Phys. Rev. B4 863 (1971)) の紹介

東大理 和田 靖

この仕事は超伝導理論での対相互作用の origin という標題で、BCSでは  $(-k\downarrow, k\uparrow)$  の相互作用だけとるが、それは相互作用としてはごく一部であるに過ぎないのでどうしてそれらが主要なのかを調べたもので、興味深い内容を含んでいる。

BCSのモデルは一般の場合には変分解 (BCSの解) しか知られていないが、運動エネルギーを無視すると厳密解が完全に求まっている。Cooper-Stölan はモデルを少し拡張して  $(-k\downarrow, k+q\uparrow)$  の相互作用も考えに入れたときの基底状態と低い励起状態のエネルギーをBCSの厳密解のそれと結びつける関係式を、グラフを分析して導く。その結果は、「基底状態のエネルギーはBCSのそれにより低くなるが、第一励起状態のエネルギーギャップはBCSと変わらない。第二励起状態は縮退がとけてひろがる」ということが判った。

この結論を実際の超伝導体に適用するのにまず問題になるのは運動エネルギーの効果であろう。この点について論文は何も触れていないが、この新しい解をかりに変分解として使ってみる。相互作用からの寄与はBCSにくらべて確かに小さくなる。運動エネルギーと相互作用は質量と相互作用の強さという独立なパラメタを含んでいるので、運動エネルギーの項がかりに大きくなっても、全体の和が小さくなる可能性はあり得よう。いずれにせよこの論文は面白い問題を提起しているようだ。

## 7. 超伝導体中のホール効果

東北大工 海老沢 丕 道

第二種超伝導体のホール角の磁場  $H$  依存性は  $H_{c2}$  以下で、直線性からはずれていることが測定されている。ふるまいは電子の平均自由行程により非常に異